

和語「恋人」の中国語での受容について

清地 ゆき子

0. はじめに

明治期に日本で訳出された近代訳語が、20世紀初頭に中国語に大量に受容されたのは周知のことで、その一部は《辞源》(1915)でも確認することができる。但し、「訓読みの和語」或いは「中国語に同義的語彙が存在する語」は中国語に定着するのが難しかったようである⁽¹⁾。

筆者はこれまで、五四時期における日中語彙交流の視点から、和製漢語“失恋”の中国語での受容⁽²⁾や日中異形同義語「三角関係」「三角恋愛」の成立と定着⁽³⁾についてまとめた。本稿では、和語であり、且つ、中国語に同義的語彙も存在した言葉の考察として、「恋人」を取り上げた⁽⁴⁾。

中国語の“恋人”は、現代中国語の規範とされる《現代漢語詞典》(2005)に収録され、“恋愛中男女の一方”とある⁽⁵⁾。しかし、中国の古典には同義的語彙として“情人”があり⁽⁶⁾、さらに20世紀初頭には新語として“愛人”という言葉も存在していた⁽⁷⁾。和語であり、しかも同義的語彙が存在する中で、「恋人」はどのような経緯で中国語に受容されたのであろうか。

本稿で「恋人」の中国語での受容過程を明らかにすることにより、五四時期における日中語彙交流の一側面を探ることができると思う。

1. 和語「恋人」について

1.1 訳語としての「恋人」

半沢1983は、「恋人」は江戸時代初期の『好色五人女』(1686)などには現代語とほぼ同様の意味で用いられたが、江戸後期から明治初期の文学では「色」「色男」「色女」「情人(いいひと)」などが使用されたと指摘する⁽⁸⁾。

「恋人」が再び、文学作品に登場するのは、筆者の調査では、1879年の「ロミオとジュリエット」の翻訳以降であった。(用例の下線は筆者、以下同様)

- 1) (ロミオ)ハ (ベンプリヲ)ノ辞ヲ覚東ナク思ヘドモ恋人ニ相見ンコトノ樂サニ我ヲ忘レテ (後略)

(「(ロミオ) ト (ジュリエット) ノ話」『喜楽の友』第1号、1879.4.10、p.12)

- 2) 其恋人なるロザリンに遭ふの便宜もあり又其心に従はざるロザリンに増す花のなきにしもあらねば (後略)

(「落花の夕暮 (ロミオ、ジュリエット)」『郵便報知新聞』1885.4.7)

恋愛が描かれた戯曲の翻訳に際し、相思相愛の男女を描写するには、江戸後期の遊里文学で遊女と客との関係に使用された「色」や「情人」などに代わり、江戸前期の文学やそれ以前に使用された「恋人」が好まれたのであろう⁽⁹⁾。翻訳にあたり用語の差異化が意図されたと推察する。

1.2 「恋人」の辞典収録

「恋人」が訳語に採用されたことは辞典類の収録からも確認できる。

- 3) [suitor] 恋思人 コイヒト ^{コイヒト}〈嬖人〉 (『諳厄利亜語林大成』1814)
4) [minnaar] 恋人 (『道訳法児馬』1833)
5) [beminde] 恋ヒ人 [minmaar] 恋人 (『和蘭字彙』1855)
6) [lover] 愛スル人、恋人 [suitor] 願人、恋人 (『英和对訳袖珍辞書』1862)
7) [lover] 恋人 [sweetheart] 恋人 (『英和字彙附音挿圖』1873)
8) [lover] 愛スル人、友、愛人、情人、恋人 (『双解英和大辞典』1892)

日本で初めて編纂された英和辞典『諳厄利亜語林大成』に収録された「コイヒト」は、その後、『道訳法児馬』『和蘭字彙』などの蘭学系辞典に「恋人」として収録される。幕末の『英和对訳袖珍辞書』では lover の訳語として収録され、明治期の英和辞典に引き継がれている。

1.3 「恋人」の汎用

「恋人」は、1880年代後半には新聞記事や小説、さらに1900年代に入ると与謝野晶子らの短歌や新詩に多く使用された。

- 9) 但し車中には彼の怨みある過にし恋人が今ま婚姻後の旅行の首程にて最も華やうに打扮ちいる新婦の手を取りて

(「違約の返報」『読売新聞』1887.10.15、朝刊3面)

- 10) 珠運が笑し氣に恋人の住し跡に移るを満足せしが、困りしは立像刻む程の大きな良木なく、 (幸田露伴『風流仏』吉岡書籍店、1889、p.84)

- 11) 恋人のやさしき胸に凭りそひて笑みつつ逝きし君は幸あり

(与謝野晶子『小天地』金尾文淵堂書店、1900.11：『与謝野晶子全集』

第1巻歌集1、講談社、1981、p.320)

12) 今は亡き姉の恋人のおとうとと なかよくせしを かなしと思ふ

(石川啄木『一握の砂』東雲堂、1910、p.90)

「北村透谷が「厭世詩家と女性」でいったような新時代の「恋愛」を鉄幹や晶子たちは「恋」という語をつかってうたった⁽¹⁰⁾」と指摘されるように、晶子の短歌には「恋」や「恋人」で始まる歌が多い⁽¹¹⁾。恋愛の対象者を表す言葉として、「恋人」が普及する一つの要因となったかもしれない。

2. 中国語における“恋人”の受容 ～翻訳、新詩、評論～

中国語では、“恋人”は20世紀初頭までの英華・華英辞典類や《辞源》(1915)には見られない。筆者の調査では、1919年のLS(魯迅)訳〈一個青年的夢〉第二幕で訳語に当てられたのが最も早い使用例であった。これは武者小路実篤の反戦戯曲『ある青年の夢』の翻訳である⁽¹²⁾。

13) 乞食 あなたの恋人は戦争で死んだのですね。何万人か死んだ内の一人になったのですね。

(武者小路実篤『ある青年の夢』第二幕、洛陽堂、1917、p.161)

乞丐 你的恋人，死在戦争裡了罷。做了死掉幾万人中的一个了罷。

(LS訳〈一個青年的夢〉第二幕《国民公報》1919.10.2、第5版)

ここでは、「乞食」が「女一」に向かって発話した「恋人」を、魯迅は原本どおり“恋人”と訳している⁽¹³⁾。

1920年代に入ると“恋人”は、日本の評論の翻訳にも見られた。用例14はY.D.が厨川白村の「近代の恋愛観」を抄訳したものである⁽¹⁴⁾。

14) 恋人のためには身をも心をも捧げて惜しまないと言ふ奉仕の心である。

(厨川白村「近代の恋愛観」『東京朝日新聞』1921.10.4)

両性間的犠牲精神。往往為了恋人的關係，雖赴湯蹈火，亦所不辭。

(Y.D.訳〈近代的恋愛観〉《婦女雑誌》第8巻第2号、1922.2、p.10)

厨川白村の「近代の恋愛観」が1922年に『近代の恋愛観』(改造社)として出版されると、中国では任白濤による抄訳《恋愛論》(上海学術研究会叢書部、1923)や夏丐尊による完訳《近代的恋愛観》(開明書店、1928)が相次いで出版されたが、いずれも原本にある「恋人」は“恋人”と訳されている。

1920年代前半に、“恋人”が最も多く使用されたのは新詩の分野と言える。現代詩の月刊誌《詩》や湖畔社の詩人による恋愛詩に度々使用された。

15) 有一夜——静寂的一夜，我跑向那孤燈点着的所在去会我底恋人。

(維祺〈黑狗〉《詩》第1巻第3号、1922.5、p.53)

(ある夜——静かな夜、私は一つだけ明かりがついている所に向かって走り、恋人と会った)

- 16) 懸崖絶壁間一對恋人，這麼悽愴地哀吟。

(汪静之〈一對恋人〉《蕙的風》亞東函書館、1922、pp.39-40)

(断崖絶壁にいる一組の恋人が、悲しみにくれて嘆く)

- 17) 蓮蕊間酣睡着的恋人啊！不要滅了你的紗燈。(聞一多〈寄懷爽秋〉1922.11.25、《清華周刊》260期文芸增刊第1期：《紅燭》泰東函書局、1923、p.185)

(ハスの花の中でぐっすり眠っている恋人よ。あなたの灯を消さないでください)

- 18) 我有過三個恋人，雖然她們都不知道。(略) 養活在我的心窩里，三個戀人的她却還是健在。(槐寿(周作人)〈她們〉《晨報副刊》1923.4.9、第2版)

(私には三人の恋人がいた。彼女たちは知らなかったけれど。(中略) 私の心の奥に養っておけば、三人の恋人の彼女はやはり健在である)

- 19) 沒有一株楊柳不為李花而顛狂，沒有一水不為東風吹皺，沒有一個恋人不為恋人惱着。

(馮雪峰〈拾首春的歌〉八《春的歌集》1923.12、pp.5-6：上海書店、1983影印)

(スモモの花に狂わされない柳はない。東の風に吹かれて波立たない水はない。恋人に悩まされない人はいない)

用例16の“一對恋人”は、現代語のように“恋人”が相思相愛であることを思わせる。汪静之は1919年から21年の間、魯迅、周作人らに作詩の指導を受け、《蕙的風》の〈序〉は朱自清、胡適らが執筆した。その中で、胡適は「完全に解放された青年詩人を見ると、丁度纏足をしていて後にそれをほどいた婦人が、全く纏足をしてない女の子たちがあちこち飛び回っているのを見て、眼で嫉妬し、心で嬉しく思うのと同じである⁽¹⁵⁾」と汪静之の詩を賞賛した。周作人も《蕙的風》の出版後、旧派から「不道德」だと批判を受けた際には、「旧道德の中で不道德とされたことこそ、恋愛詩における精神だ⁽¹⁶⁾」と汪静之の詩を擁護した。周作人自身も与謝野晶子や石川啄木などの詩を翻訳し⁽¹⁷⁾、自らの体験を語った恋愛詩の中に“恋人”を使用している(用例18)。用例19の湖畔社の詩人・馮雪峰も啄木の短歌を好み訳詩もしていた⁽¹⁸⁾。中国の恋愛詩においても、恋愛の対象者を表す言葉として“恋人”が求められたと推察する。

さらに、1920年代前半に“恋人”が度々使用されたのは、《婦女雑誌》な

どで、自由恋愛や自由結婚が盛んに論じられた評論の分野であった。

- 20) 我們所主張的『靈肉一致』是使已得到靈感的兩恋人，再能結合而發生肉感上的關係，以完成恋愛的本質，及種族的使命，並不是靈肉同時並起，就叫靈肉一致。(Y.D.〈自由戀愛与戀愛自由統編一再答鳳子女士一〉《婦女雜誌》

第9卷第2号、1923.2、p.46)

(我々が主張する「靈肉一致」は既に靈感を得た二人の恋人が、再び結ばれて肉体關係を生じさせることによって、恋愛の本質及び種族の使命を完成させることで、靈と肉が同時に生じること靈肉一致と呼ぶのではない)

- 21) 即使竭力奮鬥，脫離家庭，而社会處處是一樣的凶惡，終不許你們一對親愛的恋人插足。(小立〈恋愛問題〉《中國青年》57期、1924.11、pp.136-137)

(たとえ力の限りに頑張つて家庭から脱け出しても、社会はどこにおいても同じように恐ろしく、結局、あなたたちのような親愛なる恋人が足を踏み入れることは許されないのだ)

用例20では、Y.D.が読者の「自由恋愛」と「恋愛の自由」の相違は何かという問いに答える中で、恋愛する二人を“恋人”と表している。

1921年から《婦女雜誌》の編集長を務めた章錫琛が「私は恋愛を用いて婦女の問題を解決する出発点としたい⁽¹⁹⁾」と論じたように、同時期の知識人にとって靈肉合一の恋愛、及び女性を一個の「人」として認めた上に成り立つ恋愛の普及は、必要且つ重要なことであつたと思われる。

3. “恋人”の汎用と定着 ～小説、辞典～

1920年代後半に入ると“恋人”は小説でも使用されるようになる。張資平は日本に留学中の1920年から多くの恋愛小説を発表したが、1926年の翻案恋愛小説《飛絮》で“恋人”を用いた⁽²⁰⁾。また、日本との接点が少ないと思われる茅盾の作品にも“恋人”は度々使用された⁽²¹⁾。

- 22) 梅君不是个美男子，在他的恋人的我的眼中既不是个美男子，在其他的女性眼中更不是美男子了。(張資平《飛絮》創造社出版部、1926、p.14)

(梅君は美男子ではない。彼の恋人である私の目から見ても美男子ではないのだから、ほかの女性の目にはなおさら美男子には映らなかつた)

- 23) 「主席說，要禁止密司忒龍，同王女士戀愛。為仔王女士先有恋人，氣得來要尋死路。」(茅盾《幻滅》《小説月報》第18卷第9号、1927.9、p.15)

（「委員長は、ミスター龍と王女士の恋愛を禁止しなければならないと言った。それは、王女士にはもう恋人がいたので、ミスター龍が悔しくて自殺しようとしたからである」）

さらに、“恋人”は1920年代後半以降の辞典に収録されるようになる。1928年の《総合英漢大辞典》にloveの訳語に当てられ、《王雲五大辞典》（1930）には、“心愛的人”の意味として収録された。1945年の《国語辞典》には“相恋愛之人”と相思相愛の男女を意味することが明記されるようになる。

4. おわりに

和語「恋人」は、明治初期に西洋文学の訳語に当てられ、さらに、与謝野晶子らの恋の歌にも多く用いられることにより、恋愛する二人、相思相愛の男女を意味する言葉として普及したと思われる。

その意味を含んだ“恋人”は、1919年に魯迅が日本の戯曲を翻訳した際、訳語に当てられ、1920年代前半には湖畔社の詩人による恋愛詩や恋愛に関する評論に多く使用された。さらに、1920年代後半には小説に用いられるなど汎用された。中国の古典語である“情人”や新語である“愛人”といった同義的語彙が存在したにもかかわらず、“恋人”が受容されたのは、恋愛の描写及び恋愛という概念の普及のために必要な言葉の一つであったからだと推測する。

後に、同義的語彙“情人”“愛人”には意味の派生が生じ、“恋人”とは意味を住み分けることになる。別稿で論じたい。

注

- (1) 劉1993は、《辞源》の正編には180語、続編には37語の日本語語彙が収録されたが、訓読みの和語の場合、或いは、すでに中国語に同義的語彙がある場合は定着しにくいと指摘している。和語の定着率は12.5%（和語全数88語中11語）であった（p.9参照）。
- (2) 「恋愛用語「失恋」の成立と伝播の一考察」『中国文化』第67号、2009.6。
- (3) 「恋愛用語「三角関係」と“三角恋愛”の成立と定着—1920年代の日中語彙交流の視点から—」『日本語の研究』第6巻第2号、2010.4。
- (4) 『日本国語大辞典』（小学館、2002）は、「恋人」の意味を「その人が恋しく思っている相手。現代では特に、お互いに恋しく思い合っている場合の相手をいう（後略）」とし、初出例に『閑窓撰歌合』（藤原信実女、1251）を挙げている。
- (5) “恋人”は、《現代漢語詞典》には1996年の第3版以降に“恋愛中男女の一方”と

収録されている。また、2010年の《現代漢語規範詞典 第2版》(李行健主編、外語教学与研究出版社・語文出版社)には“相愛的男女或其中的一方”と収録されている。

- (6) 張1993は、男女の恋の感情は、「情」ということばで漢代末頃からおもに詩のなかに表れたと指摘する (p.11 参照)。《漢語大詞典》(漢語大詞典出版社、1986-1944)には、“情人”の所謂恋人の意味の使用例として、宋代の《樂府詩集》を挙げている。
- (7) “愛人”の「人を愛する」という意味・用法は、古くは《論語》に見えたが、所謂恋人の意味としてsweetheartなどの訳語に当てられたのは、日本の英和辞典類も参照して編纂された1908年の《英華大辞典》(顔惠慶等編輯、商務印書館)以降だと思われる。1920年代の創作にも所謂恋人の意味としての使用が多く見られた。また、舒1993は“愛人”の意味変化を考察し、“愛人”のこの意味・用法は日本語からの借用だとしている。
- (8) 半沢1983は江戸後期の文学に「恋人」の用例が見当たらない理由として、江戸後期の文学が遊郭の場面を中心に展開されたことと無関係ではないと指摘する (p.43 参照)。
- (9) 「恋人」は、その後の河島敬蔵訳『春情浮世之夢』(耕文社、1886)や島崎藤村訳「夏草 一回」(『女学雑誌』第324号、1892.7)、緑堂野史訳「わかきエルテルがわづらひ」(『しがらみ草紙』1893.12)などにも訳語として使用されている。
- (10) 阿木津英「明治の訳語 接吻、停車場、利己」『短歌研究』1998.4、p.47。
- (11) 『定本 与謝野晶子全集』(全8巻、講談社、1979-1981)には、「恋」「恋し」「恋する」で始まる歌が120首余り、「恋人」で始まる歌が30首所収されている。
- (12) 〈一個青年的夢〉は、1919年8月15日からまでの《国民公報》に第三幕の途中までが掲載されたが、10月25日《国民公報》の発禁により中断し、全訳は翌年の《新青年》(第7巻第2号、1920.1-第7巻第5号、1920.4)に連載された。
- (13) その後、魯迅が翻訳した〈出了象牙之塔〉(1925)(原本:厨川白村『象牙の塔を出て』(福永書店、1920)や〈現代電影与有産階級〉(1929)(原本:岩崎昶『現代映画と有産階級』『新興芸術』第1号、1929.11.1)でも原本の「恋人」は“恋人”と訳されている。
- (14) Y.D.について西横1993 (p.89:注8)は呉竟農(1896-1989)とするが、邵丹編輯《陳望道訳文集》(復旦大学出版社、2009)にY.D.訳〈近代的恋愛観〉が所収されており、Y.D.は陳望道だと思われる。
- (15) 胡適〈胡序〉汪静之《蕙的风》(亜東図書館、1922、p.14)。
- (16) 周作人〈情詩〉《農報副刊》1922.10.12。

- (17) 周作人〈雑訳日本詩三十首〉《新青年》第9巻第4号、1921.8、pp.29-40。
- (18) 施蛰存〈序〉戴望舒《戴望舒訳詩集》湖南人民出版社、1983：秋吉久紀夫訳編『戴望舒詩集』土曜美術社出版販売、1996、p.227参照。
- (19) 章錫琛〈恋愛問題的討論〉《婦女雜誌》第8巻第9号、1922.9、p.122。
- (20) 《飛絮》の〈序〉に、池田小菊の「帰る日」（『東京朝日新聞』1925.5.1-7.29、全90回連載）の翻案であると記されている。尚、張資平の1920年代前半の小説では、所謂恋人の意味では“愛人”が使用され、所謂妾の意味では“情人”で表す傾向が見られた。
- (21) 〈動搖〉（《小説月報》第18巻第9号、1928.1）、《子夜》（1933）、《腐蝕》（1941）。

参考文献

- 半沢洋子1983「恋人・愛人・情人・色」佐藤喜代治編『講座日本語の語彙』9、明治書院
- 劉凡夫1993「中国語辞書『辞源』初版に収録された日本語語彙の性格」『国語学研究』第32号
- 西楨偉1993「1920年代中国における恋愛観の受容と日本—『婦女雜誌』を中心に—」『比較文学研究』第64号
- 佐藤亨1999『国語語彙の史的研究』おうふう
- 沈国威2008『改訂新版 近代日中語彙交流史』笠間書院
- 舒志田1993「日中同形異義漢字の研究—「愛人」の意味変化をめぐって—」『文献探究』第37号
- 張簾1993『恋の中国文明史』筑摩書房

引用辞典（出版年順）

- [日本] 本木正栄編『諸厄利亜語林大成』1814／ヘンドリック・ゾーフ編『道訳法児馬』1833（ゆまに書房、1998影印）／桂川甫周編『和蘭字彙』1855（早稲田大学出版部、1974影印）／堀達之助『英和对訳袖珍辞書』1862／柴田昌吉・子安峻『英和字彙附音挿図』日就社、1873／島田豊『双解英和大辞典』共益商社書店、1892
- [中国] 黄士復・江鉄《綜合英漢大辞典》商務印書館、1928／王雲五《王雲五大辞典》商務印書館、1930／教育部国語推進委員会中国大辞典編纂処編《国語辞典》商務印書館、1937-1945

（筑波大学大学院・科目等履修生）